

子どもの自立と未来を語る会の結果について

1 日 時 令和7年7月26日（土）午後1時15分～午後3時

2 場 所 東海市立勤労センター1階多目的ホール

3 結 果

(1) 参加者 91名

(内訳)

- ・保護者40名 ・生徒 18名 ・教職員7名
- ・その他（SC、「ほっと東海」スタッフ、社会福祉協議会等）10名
- ・パネリスト7名 ・コーディネーター1名 ・事務局8名

(2) 当日の内容

ア パネルディスカッション

- ・ テーマ：不登校生徒の自立を支えるつながりと進路の問題
- ・ 内 容：卒業生、保護者、関係者による進路選択に関する経験談等
- ・ パネラー：卒業生2人（専門学生1人、社会人1人）
子どもが不登校の経験をした保護者2人
市スクールカウンセラー1人
ほっとプラザ職員1人
社会福祉協議会職員1人
- ・ コーディネーター：市スクールカウンセラー 鎌田 陽世氏

イ 就職、定時制・通信制高等学校、専門学校、サポート校等の進路先紹介

4 状 況

○ パネルディスカッションより

【専門学生】

- ・ 中学校2年生の時に過敏性腸症候群となり、いつ腹痛に襲われるのかが怖くなり、学校に行くことができなくなった。家族が「ほっと東海」を教えてくれた。また、ほっとプラザの学習支援にも参加し、大学生のサポートを受けて、勉強をがんばることができた。ケアラズカフェのボランティアに参加し、介護福祉士になろうと思った。今は、友達と外食したり外出したりできるようになり、とても楽しい生活を送ることができている。一人で悩まないでほしい。そして、誰かを頼ってほしい。「助けて」と言えるようになってほしい。

【社会人】

- ・ 中学校3年生の2学期から「ほっと東海」に通い始めた。学校、家庭、習い事など、全てがうまくいかなかった。「ほっと東海」は、家族から紹介され、祖母と見学に行った。祖母や「ほっと東海」の先生方が温かく見守ってくれたので、乗り越えることができた。広い世界に飛び出しても大丈夫だと思えることができた。

【保護者①】

- ・ 中学校2年生の時に学校に行きたくないと言い出した。親として、まさかという思いだった。しかし、子どもの気持ちを受け入れていくようにした。子どもが大学に行きたいという夢をもっていたため、学校が出席扱いになる「ほっと東海」を紹介した。親として、子どものことを第一に考えて、小さなことであっても、やりたいことや楽しいと思うことを大切にしていた。そうすることで、少しずつ一緒に外出できるようになっていった。子どもが行きたいと思った高

校に見学や体験に付き添い、子どもの気持ちに近づくことができた。

【保護者②】

- ・ 中学校2年生の時に不登校になった。子どもは、人とのコミュニケーションが苦手な部分があった。親として一番辛かったことは、「自分なんていなくていい存在なんだ」と子どもに言われたことである。理不尽なことを言われた時は、理解できない部分もあったが、子どもが自分自身の存在を否定した時には、「それはちがう」としっかり否定したり、目を合わせて話をしたりした。また、将来仕事をするにあたっては、高校卒業の資格などが必要だということを話していた。子どもと一緒に過ごす時間を大切にしたい。当時、子どもが不登校であることを友達に相談したり悩みを聞いてもらったりしていたことが支えとなっていた。子どもが不登校になることは、親にとっても辛いことだが、子ども本人が一番辛いはずである。子どもと同じ目線で向き合い、そして誰かに相談することが大切だと考える。

【市スクールカウンセラー】

- ・ 不登校は、誰にでも起こりうることであり、スクールカウンセラーも含め、幅広い支援が必要である。本人だけでなく、保護者への支援にも繋がると考える。家族は、本人の成長を待つことが必要ではないか。しかし、それは時間がかかり大変なことである。子どもが不登校になった時に、夫婦の関係、兄弟の関係など、今までの生活で考えてもいなかったことが大変になってくる。しかし、本人が新しい経験を広げたり、対人関係を広げたりする中で、エネルギーを蓄えてもらうことが成長につながっていくと考える。

【ほっとプラザ職員】

- ・ 「こんなことがしたい」「こんなことがしたくない」、不登校の子どもはいろいろなことを考えている。どんなことでもいいので、ほっとプラザで聞かせてほしい。話を聞かせてもらった時に、否定したり、良い悪いを判断したりすることはしない。不登校の子どもを支えている保護者の方は、「自分で何とかしなければ」と思う気持ちが強いのではないかと感じる。ぜひ、ほっとプラザに相談に来ていただきたい。

【社会福祉協議会職員】

- ・ 相談できる機関や窓口が増えてきている。そういった相談機関を活用してほしい。悩みを相談する中で、子どもやご家庭にあった相談機関が見つかる。相談を受けるだけでなく、ニーズにあった相談機関を紹介することも大切に行っている。保護者の方は、悩みを溜め込んでしまうのではなく、第三者に悩みをはき出したり、言葉として出したりして楽になってほしい。子どもにとっての第三の「居場所」を考えていく必要がある。家庭、学校以外の居場所が、社会の中であるのではないかと感じる。子どもにとっての第三の「居場所」づくりを進めている。ボランティア活動や地域の活動の中で、「居場所」を見つけることによって、自分自身の良いところが必ず見えてくる。また、ボランティア活動等を通して、子どもがもっている力が見つかる機会となる。

○ 感想

【参加者保護者】

- ・ パネリストの自然体で堂々と語る言葉に子どもの力、成長する姿を改めて実感した。
- ・ パネリストの話を聞かせていただき、気持ちが楽になった。いろいろなところ

に頼っていきたいと思えた。

- ・子どもとの関わりの中で、どうしても親の方が焦ってしまう。それにより、子どもへの言い方がきつくなってしまうことが多い。本日の話があった支援方法を参考にしていきたい。
- ・我が子がどの方向へ進んだとしても、サポートしてもらえる場所があることが分かり、安心した。
- ・子どもの進路については、先のことだと思っていたが早めに情報を集めていきたい。
- ・不登校の子どもを抱える親として、自分だけじゃないと勇気づけられたり、涙が出そうになったりした。不登校の親子にとって、不安なことばかりであるため、このような会は、本当にありがたいものだと感じた。
- ・この会の内容を家族で共有したい。
- ・親だけで抱え込まずに相談しながら、乗り越えていきたい。
- ・子どもの進路の多様な選択肢を理解できた。
- ・不登校を経験した本人や親の話を聞く機会がなかったため、大変勇気づけられた。
- ・小学校から不登校だった方の経験談も聞いてみたい。
- ・「相談してほしい」「言葉をはき出してほしい」という言葉で心が軽くなった。
- ・中学校卒業後の進路について、様々な選択肢やこれから必要な物事を知ることができた。子どもが自分に合った環境を見つけていけるように様々な視点から進路を探していきたい。
- ・小学校から不登校だったパネリストの話も聞いてみたい。小学校から不登校であると、学習へのつまずきがより大きくなるため、もっと苦しい状態である。
- ・子どもの気持ちに寄り添うことの大切さを教えていただいた。
- ・特別支援学級の保護者向けの進路説明会を開催してほしい。特性のある子どもやその保護者も安心できるのではないかと考える。
- ・「ほっと東海」を利用せずに中学校時代を過ごし、進学した不登校経験のある卒業生の話も聞いてみたい。

パネリスト

- ・この会で、自分の気持ちや自分が選択した道について改めて向き合うことができた。とても良い経験になった。
- ・同じパネリストの方々から貴重な話を聞くことができて、大変参考になった。参加者の方々が熱心に聞いてくださる姿が印象的だった。

【その他】

- ・目指すところは、「学校に行けるようになること」ではなく、将来の夢に近づくことや自立することだと改めて感じた。

5 来年度へ向けて

- ・パネリストの話に引き込まれるように熱心に話を聞いていた。終了後の感想から、思いを共有したり、励みになったりする貴重な機会となっていることを感じた。不登校が増加する中、今後も会を継続する必要がある。
- ・パネリストや参加される保護者にとって休日の開催がよいと考えるが、教員の参加が少ないことが課題である。各校の不登校担当者の参加を呼びかけていきたい。

- ・パネリストの選定が「ほっと東海」の卒業生や、その保護者に限られてしまっている。「ほっと東海」に通級していない不登校の経験者やその保護者をパネリストに選定する方法を検討する必要がある。
- ・受付で、ほっとプラザや社会福祉協議会のパンフレットなどを配付できるようにしていきたい。